

Contents

特集：分裂のアメリカに何を見るか	1p
<今週の”The Economist”誌から>	
”Dropping the anchorman” 「さらばアンカーマン」	8p
<From the Editor> 「（少し早いけど）2004年を振り返って」	9p

特集：分裂のアメリカに何を見るか

あの米大統領選挙からすでに1ヶ月。日に日に世間の関心は薄れていき、世の中はブッシュ再選後の世界の動きに対応することに追われているように見えます。それでも「ブッシュ再選」を決めた米国の「民意」と、そのような結論が導かれた経緯については、しつこくこだわっていく必要があるように思います。それは、今後の米国外交を占う重要な材料であるだけでなく、日本社会の明日を見通す上でもヒントを与えるものであるからです。

今週号の文章は、「米大統領選の裏側の事情」を検証したものです。本来はある月刊誌用に書いたのですが、専門的過ぎると不掲載（ボツ）になったので、こちらに転用しました。本誌の読者には、ご理解をいただけるのではないかと考える次第です。

態度変更はわずかに三州

何はともあれ、アメリカ大統領選挙が終わった。選挙人の獲得数がブッシュ286対ケリー252であり、最後はオハイオ州の13万票差であったと聞けば、「史上まれに見る接戦」である。他方、ブッシュが一般投票で史上最高の5945万票を得て、大統領選挙では久しくなかった過半数を超える51%を取ったことに着目すれば「意外な大差」とも読める。

が、「選挙オタク」的な感慨をいわせていただくならば、州ごとの勝敗を振り返ってみる限り、驚くほど代わり映えのしない結果だったと思う。以下は大統領選挙の直前に筆者が行った「票読み」である¹。

¹ 本誌2004年10月29日号のFrom the Editorから。

ブッシュ：291

2000年の勝利州に加えてウィスコンシン州（10）とアイオワ州（7）をゲット。激戦州では、フロリダ（27）を意外な差で確保。台風後の被災地を何度も回ったことが勝因か。今回は一般投票でも相手候補を上回る。

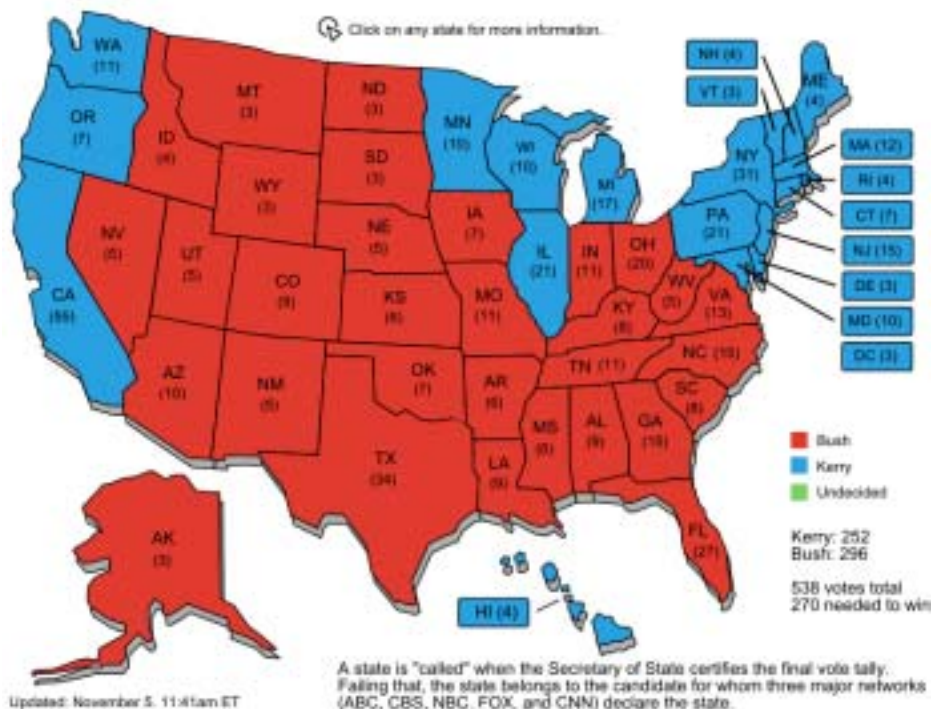
ケリー：247

メジャーリーグにおけるレッドソックスの優勝も追い風に、2000年の勝利州に加えてニューハンプシャー州（4）をゲット。激戦州では苦戦の末、ペンシルバニア州（21）を押さえるが、最後の激戦地オハイオ（20）が僅差であと一步届かず。

ブッシュが勝つはずの「ウィスコンシン州（10）」を、「ニューメキシコ州（5）」に置き換えるとドンぴしゃり、であった。

「俺ってすごいだろ」という自慢話をしたいのではない。2000年と違う結果を出した州が3つしかなかった、という点に驚いてほしいのだ。それも風向きを変えた3州は揃って僅差だし、ニューハンプシャー州はケリーの地元、マサチューセッツ州の「裏庭」だというもっともな理由がある。

赤と青に塗り分けられたアメリカ²



² <http://www.race2004.net/> 選挙期間中、何度もお世話になったこのページは、最終結果を提示している。

上の地図は2004年選挙の結果である。ブッシュ支持州とケリー支持州が、見事に分かれているのが分かるだろう。面積は圧倒的にブッシュ支持州が多いのだが、人口的にはこれでいい勝負であり、ケリー陣営がオハイオ州を制していれば、それで新政権発足であった。そして、この地図の色分けは2000年とほとんど変わっていないのだ。

全米の政党支持には、次のような「固定化」が生じている。

北東部と太平洋岸は民主党

南部と西部（ロッキー山岳州）は共和党

中西部は五大湖沿岸で民主党、内陸部で共和党

現在のような形が定着したのは、そんなに古い話ではない。第二次世界大戦後すぐの頃は、北東部が共和党で南部は民主党であった。当時の共和党は都会的で進歩的、民主党は田舎に強くて伝統的価値観に理解のある政党だった。さらにいえば、産業資本に近い共和党は保護主義で、農民を支持母体とする民主党は自由貿易主義だった。

これらの二大政党の特色は、時間をかけて入れ替わることになる。今では共和党が田舎に強い自由貿易政党で、民主党が都市で強い保護貿易政党であることが常識になっている。なぜ、そのような大転換が実現したのか、詳しい政治学上の分析はまだ見たことがない。

が、とにかく90年代以降は、二大政党の地盤の定着化が急速に進みつつある。こんな調子であと2~3回選挙をやってみたらどうなるのか。「アメリカの分断」はいよいよ固定化し、取り返しのつかないところまでいってしまうのではないかと心配になる。

赤と青に色分けされたアメリカ

ブッシュかケリーか。正直言って、政策的にたいした違いはなかった。テロ対策、イラク情勢、経済と雇用など、どの問題でも打てる手は限られているからだ。

大きく異なっていたのは両者の個性であった。対照的な個性が、両者の支持層をくっきりと分け隔てた。保守とリベラル、南部と北東部、質朴とインテリ、訥弁と能弁、直情径行タイプと深沈厚重タイプ、良妻賢母の妻と億万長者の妻、といった対比が両者にはある。どちらを支持するかは、いわば有権者の人間性を問う踏み絵となる³。

そして前者の個性を評価するような土地柄は「赤い州」（ブッシュ支持州）となり、後者を好む地域は「青い州」（ケリー支持州）となった。

2つに分断されたアメリカの違いはどこにあるのか。以下は代表的な「赤と青」の定義である。

³ ケリー支持州のほうが知能指数が高い、というデータさえある。<http://chrisevans3d.com/files/iq.htm>

沿岸部と内陸部：海外の評判を気にする沿岸部はケリーを支持し、国内のことだけ見ている内陸部はブッシュ支持になった。青い州はカリフォルニアやニューヨークなど、海外に向けて情報を発信する州が多く、赤い州ではそもそもパスポートを保有するアメリカ人が極端に少ない。

ポップミュージックとカントリーウェスタン：ブルース・スプリングスティーンをはじめ、ケリー陣営にはロックやジャズ、ブルースなど都会的なミュージシャンが応援団になった。対照的にブッシュ陣営を支持したのは、カントリーウェスタンのミュージシャンたちだった。日本に置き換えれば、「洋楽ファンの民主党と演歌ファンの自民党」といったところだろうか。

スターバックスとウォルマート：ケリー支持州は、都会的なスターバックスのチェーン店が進出している地域だった。ブッシュ支持州にはそんな洒落たものはなく、あるのは「エブリディ・ロープライス」のウォルマートのスーパーマーケットである。

ポルノと聖書：ニューヨーク州やカリフォルニア州など、ケリー支持州の多くはA VビデオやDVDを堂々と売っている州だった。ブッシュ支持州の多くは、「バイブル・ベルト」と呼ばれるような、信仰心の厚い人々が多い州である。

メトロとレトロ：IT産業など、新たな価値を生み出し、納税額も多い「メトロ」の地域では民主党が強い。農業やエネルギーなど、古い産業が多くて補助金を受け取っているような「レトロ」の地域では共和党が強い。

普通、われわれがアメリカを思い浮かべるときに、念頭におくのは青い州のアメリカである。つまり沿岸部に位置し、ポップミュージックを愛好し、スターバックスがあって、人種の坩堝であるアメリカだ。日本人の渡航先といえば、カリフォルニア州、ニューヨーク州、ハワイ州といったところが大部分を占めるだろう。またアメリカ発の情報も、ほとんどは青い州が発信源となっている。

他方、内陸部の赤い州には、カントリー・ウェスタンを愛好し、ウォルマートで買い物をし、毎週日曜日には教会に通うような、白人中心の社会がある。そちらのことは、日本ではあまり知られてない。

たまに見かけるのは、「キリスト教右派」に関するおっかない報道である。が、仮にテキサス州あたりで、実際に教会に通っている人たちと話してみれば、少々信仰心が厚いことくらいで、彼らも普通のアメリカ人であることに気がつくだろう。赤と青の違いは、ちょっとした価値観の差に過ぎないのだ。

保守化 = 赤優位のアメリカ

赤と青、現実に勢いを増しているのは赤い州の方である。

アメリカでは10年に1度のセンサス（国勢調査）により、州ごとの議員定数をきっちり見直していく。その結果、各州の選挙人の数も変動するのだが、そのお陰で青い州は選挙人が減り、赤い州では増えている。アメリカの人口は北から南へと移動しつつある。気候も温暖だし、企業も規制が少ない南部の州を選ぶのだ。

また、2004年選挙では議会選挙においても共和党が上下両院で議席を伸ばしている。赤い州の方が数は多いために、「1つの州で定数2」の上院議員は、それだけで共和党が有利となる。また、各州ごとに人口比で配分される下院議員は、「ゲリマンダー」と呼ばれる恥ずべき行為が行われるので、これまた現職議員が多い共和党が有利になる。ゲリマンダーとは、選挙区の線引きを現職が自分に有利に変えてしまうことで、定数是正が頻繁に行われるアメリカでは古来、ありがちな現象である。かくして、「下院選挙は現職優位」という構図が定着しやすい。

赤と青の度合いの問題もある。下記の表は、過去4回の大統領選挙において、各州の「赤と青」の度合いを分類したものである。今回の選挙では、共和党候補が民主党候補に10%以上の差をつけて勝った「濃い赤」の州が、実に22州にもなっていることが分かるだろう。逆に「濃い青」の州は1桁に減っている。

過去4年間の選挙の推移

			共和党州			民主党州		
			濃い赤	ピンク	薄い赤	薄い青	水色	青
			10%以上	5～10%	5%未満	5%未満	5～10%	10%以上
2004	ブッシュ286	ケリー252	22	5	4	6	5	9
2000	ブッシュ271	ゴア266	18	6	6	6	4	11
1996	クリントン379	ドール159	6	7	6	4	6	22
1992	クリントン372	ブッシュ父166	4	7	7	11	7	15

つまり時間がたつにつれ、「赤い州はより赤くなり、青い州は薄い青になっている」のである。すなわち、現在のアメリカに起きている現象は、「地域の分裂」と同時に、「国全体の保守化」でもある。

このことが分かっているだけに、今回、ケリーを支持した人々の憂色は濃い。2004年選挙において、民主党は勝つためにあらゆる条件をそろえていた。党がこれだけ団結したことはかつてなかったくらいだし、選挙資金もブッシュ陣営に負けないくらい集めた。ケリーとエドワーズという組み合わせは、考えられる限りもっとも有力な候補者であった。そして何より、「敵失」にも何度も恵まれた。

最近、ネット上ではケリー支持者たちが作った「sorryeverybody」（皆さんゴメンナサイ）というホームページ⁴が評判になっている。市井のケリー支持者たちが、「世界中で嫌われ

⁴ <http://www.sorryeverybody.com/gallery/1/>

ているブッシュを再選させちゃって申し訳ない」と懺悔をするページである。フロントページにいわく。

「私たちは、今度の選挙が世界中の市民の皆さんに、どんな影響を与えるか理解しようと努めているのです。私たちの指導者とやらが、皆さんをこれまで以上にお騒がせすることに対し、私たちは、本当にホントに済まなく思っているのです。そう思っていない人たちの分まで」。

こういうセンスは「さすがアメリカ」を感じさせるのだが、単なる冗談サイトではなく、本気で打ちひしがれている様子の参加者が多いのが気になる。彼らの視線は、「この先の4年間、もう何もいいことはない」と物語っているようだ。

戦闘的な純正リベラル派の嘆きはもっと本格的である。ロバート・ライシュ元労働長官は、新著『アメリカは正気を取り戻せるか』（東洋経済新報社）の中で、保守派への戦いを宣言している。

この本は、「リベラルであることは、誇るべきことである」という一文で始まる。ライシュは、過激な保守派を「ラジカル・コンサバティブ＝ラドコン」と呼ぶ。もう「ネオコン」だけを非難しているのでは足りない。極端な右派が支持を拡大し、メディアを巧みに利用し、宗教勢力と結びついて権力を動かしていることに対して警鐘を鳴らしている。

1932年から1980年までの48年間のうち、32年間は民主党の大統領だった。ところが1980年から2004年までの24年間で、民主党がホワイトハウスを支配したのは8年間だけである。さらに下院、上院、州知事など、あらゆる場所で民主党は劣勢にある。リベラル派の悩みは深い。

党派色を深める二つの理由

ところで世論が二極化し、その中でも保守化が進むというのは、程度の違いはあれ、わが国でも生じている現象である。なぜそんなことになるのか、気になるではないか。

アメリカ政治における党派色の強まりについては、いささかの歴史的経緯がある。民主党側の遺恨は、2000年選挙で「勝利を盗まれた」ことに由来する。マイケル・ムーアの映画『華氏911』が、フロリダ再集計のシーンから始まるのは象徴的である。

これに対する共和党側の屈辱としては、「あのクリントン大統領を弾劾に追い込めなかった」という1998年の原体験がある。共和党側が「ABC（エニバディ・バット・クリントン）クリントン以外なら誰でも」と力を込めた結果が2000年選挙であり、民主党側が「ABB（エニバディ・バット・ブッシュ）ブッシュ以外なら誰でも」と雪辱を期したのが2004年選挙であった。

と、このような経緯はさておいて、国論が二分されることには、ある程度構造的な原因があるように思える。

ひとつは選挙制度の問題だ。アメリカは小選挙区、二大政党制の本家本元である。この制度の下では、最悪、49%の「死に票」ができてしまうが、それでも「強い与党 = 政府」ができるのがメリットである。しかし、政党が保守、リベラルのどちらかに偏った場合、いちばん数が多い穏健派層を取り込めないのが、多数を取るためには中道に歩み寄らなければならない。結果として、二大政党は政策では大差のない存在になる、というのがこれまでの常識であった。

しかし最近の議会選挙は、前述のようにゲリマンダーなどの事情でほとんどが「無風区」になってしまっている。2004年選挙では、激戦区と呼ばれたのは、上院34議席中10議席、下院435議席中の36議席程度に過ぎなかった。あとのほとんどは無風区、つまり党の候補者となった瞬間に、ほとんど当選が決ってしまうのだ。

こうなると事情は変わってくる。議員の目標は「党の予備選挙に勝つこと」に絞られる。党内の支持を得るためには、右寄りないしは左寄りの極端な主張を訴えるに限る。かくして党派色の強い政治家が増えるのである。

とくに共和党議員の中では、過激な保守思想の持ち主が増えている。昔の共和党には財政保守主義という伝統があり、財政赤字を嫌う傾向があった。ところが最近は減税こそが善であるという主張が増えている。政府などという野獣は、放っておけば無駄なプログラムを拡大してしまうのだから、カネの入り口を縛ってしまい、野獣は飢えさせるくらいがちょうどいい、などという。つまり財政赤字は忌むべきどころか、多々ますます弁ず、というのである。

気がつけば、「穏健派の共和党議員」が極端に少なくなってしまった。ほんの少し前までは、故きハインツ上院議員のように、東部出身で、見るからにお金持ちというロックフェラータイプの上院議員がいたものだが、最近では共和党の主流派を形成しているのは南部の過激な議員たちである。

民主党側にも同様な構図がある。予備選挙が始まったとき、もっとも勢いがあったのはハワード・ディーン・ヴァーモント前州知事だった。党派色を強く出さないと、党内の戦いを勝ち抜けない。次回、2008年の大統領候補選において、ディーンは強い影響力を持つだろう。

こういった構図が保守とリベラルの対立を先鋭化させている。

新しいメディアが作る二極化世論

政治家だけではない、世論自体も保守とリベラルに二極化している。その背景にはメディアの問題があるように思う。

マルチメディア時代が到来し、インターネットのような情報伝達手段が誕生することで、人々の意見は多様化する、ということが従来から言われてきた。しかし実際には、メディアの多様化が人々の意見を単純な二極構造にしているのではないかと。

メディアが多様化したことで、人々は「自分の好みに合う」媒体を選択するようになった。保守派であれば、リベラルな三大ネットワークからではなく、フォックスニュースで情報を得る。逆にCNNは、「クリントン・ニュース・ネットワーク」と呼ばれるほど民主党寄りとされる。なるほど両者を見比べると、フォックスのキャスターは白人ばかりであり、CNNでは黒人やアジア系が多く起用されている。

また、保守派の論客、ラッシュ・リンボアの過激なラジオ・トーク番組を聞く人口は、全米で2000万人にも達するという。「耳に心地よい」意見を聞きたいという需要が、こうした番組を成立させている。そして似たような考え方の持ち主が増えていくのである。

この傾向は、インターネットのような新しい情報伝達ツールにおいてさらに顕著なようだ。2004年大統領選においても、ネット上ではブッシュ叩きからケリー嫌いまで、さまざまなホームページが立ち上げられて情報を発信した。ブログや掲示板といった形での議論も活発だった。ハイパーリンクでつながれた仮想空間は、うまく使えば非常に効率の良い議論の場となる。が、実際にネット上で行われた選挙関連の議論の多くは、日本の「2ちゃんねる」などの掲示板での議論と同様に、非常に党派色の強いものだった。

インターネット上での議論は、どうしても刺々しいものになりがちだ。まず、書き言葉は話し言葉よりも過激になる。また、相手の顔も見えない状態で、多くは深夜に行われる書き込みは、互いに気配りを欠いた物言いとなる。さらに議論に勝ちたい、反対派を沈黙させたいという誘惑が、双方の批判を無意味にエスカレートさせていく。

かくして議論を深めるというよりは、分かりやすいキャッチフレーズの応酬が多くなっていく。いや、そもそも頭を使う必要さえない。「コピペ」と呼ばれる手法で、誰かの気の利いた意見を切り貼りすることで、議論に参加したような気になることもできるのだ。ここまで来ると論争は知的な作業というよりも、「赤勝て、青勝て」の単なるスポーツになってしまう。

飛躍だと思われるかもしれないが、ビル・クリストルやロバート・ケーガンのようなネオコンの議論が、大きな影響力をもつようになった原因の一つは、彼らの文章の読みやすさにあると思う。敵味方を峻別し、分かりやすい比喻で状況を戯画化し、敵方を容赦なく罵倒する。実にネット向きのスタイルであり、時代の雰囲気と適合している。

逆に反対勢力のサイドやチョムスキーなどの文章は、あまりに晦渋で当世風ではない。ネットの読者たちは、「行間を読む」ような悠長なことはしないのだ。

かくして分かりやすい議論が幅を利かせ、世論の党派色は強まっていく。こういった二極化現象は、日本から見ても「明日はわが身」と感じられないだろうか。

昨年、養老猛司氏の『バカの壁』が大ヒットしたが、何のことはない、せっせと壁を高くしているのは、真面目な議論を避ける個々人の怠慢な心情なのではないか。そしてメディアの進化がそれを加速しているというのも、なんととも寒々しい話といえるだろう。

< 今週の”The Economist”誌から >

”Dropping the anchorman”

「さらばアンカーマン」

Lexington

November 27th 2004

* CBSの名物キャスター、ダン・ラザーが引退。The Economist誌の論評やいかに。なお、蛇足ながら原題は「錨を降ろす」のシャレです。

< 要旨 >

ホワイトハウスと議会、双方で共和党が勝利した20日後、保守派は憎っくきダン・ラザーの引退に祝杯をあげた。ラザーはニクソン叩きで名をあげ、アンカーマンとしてCBSを品行方正なリベラルに導いてきた。イランコントラ事件でブッシュ父と口角泡を飛ばし、米軍侵攻直後のフセインにインタビューもした。73歳、来年3月にアンカーマンの職を辞する。

前任者ウォルター・クロンカイトを引き継いで、ちょうど24年。ラザーの評判は、ブッシュの州兵勤務に疑問を呈したCBS『60分』製作以来、地に落ちた。ブッシュが命令違反をした証拠書類を入手した宣言したものの、放送の14時間後には書類が偽物だという声がネットで流れた。ラザーは12日間、持説を通し続け、支持者は応援したが、真実は逆だった。

ラザーの引退は二つのパワーシフトを表している。ひとつはオールドメディアからニューメディアへ。そしてリベラルな既存メディアから、新しい多様な声へ。

戦後の米国メディアは、リベラルな常識に支配されてきた。ニューヨークタイムズは新聞の王様であり、アンカーマンはテレビニュースを睥睨していた。かかる常識は今日、包囲されている。ひとつはケーブルテレビ、とくに保守派のFOXニュースによって。そしてもうひとつはブロガーたちの挑戦だ。今やサイトさえあれば、誰でも評論家になれるのだ。

今回の選挙では、ニューメディアはオールドメディアを凌駕した。ケリーの勲章疑惑については、ネット上の「ドラッジレポート」が効果大だった。『60分』が民主党の汚点に転じたのも同様。ダッシュル上院議員のまさかの落選も、地元ブロガーの攻撃がモノを言った。特にオールドメディアの偏見を叩くとき、ブロガーたちの舌鋒は冴える。彼らにとってニューヨークタイムズやCBSは格好の餌食である。ラザー攻撃は今後も続くだろう。

NBCのトム・プロコウも退職し、残るはABCのピーター・ジェニングスのみ。が、人が変わったからといって、三大ネットワークが復活することはない。米国人の情報源は多様化しており、単一の報道機関のみが真実を伝えていると信じるものは少ない。

古いメディアが衰退することで、世論は右寄りになるだろう。が、ニューメディアはアナーキーな存在である。ディーンを支持したような左派のブロガーも少なくない。保守派のブロガーたちも、2002年にトレント・ロット上院院内総務の人種差別発言を激しく攻撃した。2期目のブッシュがスキャンダルに見舞われれば、彼らはバッシングの先頭に立つだろう。

ラザーの引退は「リベラルから保守へ」を意味しない。ニューメディアによって、すべての権威が揺さぶられる。それは、まことに結構なことではないか。

< From the Editor > (少し早いけど) 2004年を振り返って

師走です。今年も残るところ1ヶ月。「今年は何があった年だっけ?」と聞かれ、図書室に並んでいる日経新聞縮刷版2004年分の背文字を拾い集めてみたのが以下の項目です。月並みですが、本当にあっという間の1年でありました。

- 1月 陸上自衛隊にイラク派遣命令
- 2月 カネボウが産業再生機構で再建へ / オウム松本被告に死刑判決
- 3月 日本メキシコFTA締結 / 三菱ふそうタイヤ脱落リコール届出
- 4月 三邦人イラクで人質に
- 5月 拉致家族5人帰国 / EU25ヶ国体制発足
- 6月 年金改革法成立 / イラクに主権委譲
- 7月 米連銀が利上げ / 参院選、民主躍進で自民上回る / U F J、三菱東京と統合へ
- 8月 アテネ五輪開幕。(日本は東京五輪以来の金メダル16) / WTO枠組み合意
- 9月 プロ野球初のストライキ / NY原油初の50ドル台 / 第2次小泉改造内閣発足
- 10月 新潟中越地震 / ダイエー再生機構に支援要請
- 11月 米大統領選挙でブッシュ再選 / 中国潜水艦の領海侵犯

この季節、お馴染みの「流行語大賞」は、大賞が「チョー気持ちいい」(アテネオリンピック水泳代表選手 北島康介さん)でした。以下、「気合だー!」(アニマル浜口さん)、「サプライズ」(自由民主党幹事長 武部勤さん)、「自己責任」(該当者なし)、「新規参入」(ライブドア社長 堀江貴文さん)などが続きます。

普段、あんまりテレビを見ないもので、今頃になって「ギター侍」の存在を知った筆者は、「って言うじゃない...」「残念!」「斬り!」(波田陽区さん)が気に入っていて、この「残念!」がいかに2004年の雰囲気を表していると思います。諸事、うまくいっているように見えるけれども、「でも、アンタ!」とあらためて突っ込まれてみると、意外と心もとない。慢心なされますな、というのが今年の教訓であるような。

編集者敬白

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記までお願いします。

〒107-0052 東京都港区赤坂2-14-27 <http://www.sojitz-soken.com/ri/>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)5520-2195 FAX:(03)5520-4954

E-MAIL: yoshizaki.tatsuhiko@sea.sojitz.com